



高等学校における不登校から中途退学に至った事例
への教育相談：
ロゴセラピー的観点からのアプローチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永島, 聡, 山田, 邦男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004719

高等学校における不登校から中途退学に至った事例への教育相談

－ロゴセラピー的観点からのアプローチ－

永 島 聡・山田邦男

1. はじめに

高校において長期化した不登校を呈する生徒は、それ以前にも不登校を経験していることが多い。彼らは、義務教育の段階では、不登校を続けたとしても、進級や卒業ができるか否か、といった問題に煩わされることは少ないと言える。義務教育でない高校で初めて、その問題を突きつけられることが多いであろう。すなわち、これからどう生活していったらいいのか、少なくとも当面どうしたらいいのか、といった問題に、高校では直面せざるを得なくなる、と言えよう。このことから、その生徒がこれまでどう生きてきたか、今そしてこれからどう生きていくのか、といった、生き方の観点から、不登校について考える必要がある場合があると言える。加えて、高校での不登校の事例には、結果的に退学を選択していくものが多いことも確かであり、その場合「どう退学していくか」といった問題を考える必要もあると思われる。その退学が外傷体験になるか、人生の次の段階への前進になるかで、退学ということについての、生徒の人生の中での意味付けは異なってくると考える。これらの点を考察するにあたり、フランクル Frankl, V.E. におけるロゴセラピーの理論が有効である可能性は高い。

本稿において、生徒の人生の選択に、どのように付きあっていけるのか、生徒がどう中退していけるのかを、高校教育相談における臨床心理士による面接の一事例を通して、ロゴセラピーの理論を手がかりにして考究する。本事例は、次のような制度におけるものである。すなわち、公立高校の学区等の一範囲を、

一人の臨床心理士が教員へのスーパーバイザーとして担当し、教員からの依頼を受け、連携して検討する中で、必要に応じて生徒や保護者と面接する、という形式をとるものである。

2. 不登校へのロゴセラピー的アプローチの意義と実際

فرانクルは、人間には「意味への意志」が本来的に備わっており、これが何らかの形で疎外されると、実存的欲求不満に陥り、神経症的症状を呈することがあると述べている。このような患者に対して、「患者の人格が心の底から実現しようとしている可能性、また挫折した意味への意志を満たし、人間の意味への欲求を満足させることのできる価値、を発見しようとする」のが、ロゴセラピーである、と言う⁽¹⁾。

一方、現代はフランクルによれば「実存的空虚感」が蔓延している時代である。これには様々な要因が考えられるが、その分析はともかくとして、今日の青少年が自らの人生観や価値観の選択・決定に関して大きな困難に直面していることは否めない。特に中学から高校にかけての時期は、彼らが様々な苦悩や困難な条件と対決しながら、自分のこれからの人生をどう築いていくかという問題に初めて直面する時期である。言い換えればこの時期は、人生の意味・責任性・自由といった精神的態度が初めて問われる時期である。フランクルのロゴセラピーの実践ではこのような年代のケースは見られないが、ある意味では、このような年代の人々にこそロゴセラピーが重要な援助的意義を有しているとも考えられる。

ところで、永田勝太郎らは、ロゴセラピーに基づく「全人的医療」を、心身医療において提唱している。全人的医療とは、「医療の視点を、患者の臓器単独に置くのではなく、患者をいついかなる場合においても、‘病を持った人間’として捉え、身体的・心理的・社会的・実存的視点から、包括的（全人的）に理解し、その過程の中から、患者固有の問題解決を図ろうとするもの」である

と述べられている⁽²⁾。

フランクは、自らの「精神的人格」という概念について、次のように述べる。すなわち、心や身体はそれぞれ、内的・外的刺激等に影響を受けるものであるが、精神的人格は、それらに対してある態度を自由にとることのできる主体であり、全く情緒的に刺激され得ない、と言う。このことについてフランクは、内因性うつ病に対する2人の患者の態度を例にあげて説明する。この身体面に起因すると考えられる精神症状に対して、1人はうつ病の中に落ち込み、もう1人は病気に対して距離を置き眺めることができた、ということから、問題は内因性うつ病の側にあるのではなく、精神的人格がどのような態度をとるか、という観点からこの問題を考える必要がある、と述べる⁽³⁾。精神病によって人間の全存在を説明することは、「一般化の誤謬」であり、ニヒリズムである、ということである⁽⁴⁾。全人的医療の包括的理解の強調は、このようなフランクのロゴセラピーの思想により基礎付けられていると考えられる。

この全人的医療の立場から、不登校に対するロゴセラピー的治療がいくつか報告されている。例えば、永田らによる、起立性低血圧、過敏性腸症候群等を伴う初診時高校2年生女子の不登校の症例への7年間の経過観察がある⁽⁵⁾。ここでは、身体的疾患への各種検査ならびに治療に加えて、心理面をもサポートしつつ、漢方など東洋医学的手法も取り入れながら関わっていった過程について述べられている。この患者は、不登校の後高校を中退、アルバイトなど様々な経験の中での試行錯誤を経て、大学入学資格検定に合格、大学へ進学し、希望する職業へ向けての勉強に励むようになる。また、起立性低血圧は完治し、便通も軟便程度になったとのことである。

これらは、身体的な症状を呈しており、医療的サービスの対象となり得るものであり、医療現場からの研究である。一方、高校の教育相談現場での面接過程における、治療者-被治療者間の関係の中での諸々の変化に対する、ロゴセラピー的観点からの研究については、寡聞にして知らない。本稿においては、身体的には特に問題はなく、また精神病圏でない、したがって医療の対象とは

ならず、教育相談に適する、と判断できる事例を取り上げ、高等学校におけるロゴセラピーの可能性について考える。

また、フランクルは、治療者のとるべき態度として、以下のようなことを述べる。すなわち、「患者に、彼を待っている価値や、満たしてくれるように彼に期待している意味を、自分で発見せしめることにとどまるべき」であり、「いかなる場合にも考慮されてはならないのは、治療者の価値体系や世界観を患者に強制すること」である、と言う⁽⁶⁾。本稿では、事例を通して、特にこの治療者側の態度をより具体的に検討し、不登校から中途退学への過程の時期に、治療者が来談者である生徒にどのように寄り添っていくことができるのか、考えていく。そして、生徒本人がどのように苦悩し、生徒本人と治療者との関係のダイナミズムの中で、彼がどのように変化していくのか、といった点にも留意して論を進めるものとする。

3. 事例の内容

以下に、面接過程の内容を述べる。“…”はA本人、「…」は母親、〈…〉は治療者の言葉である。

事例A 男子 相談開始時高1

主訴：

不登校

来談までの経過：

入学式と、その後数週間は登校したが、以来登校しなくなる。学校では、生徒間のトラブル、教師に強く注意されたなど、そのきっかけになるようなことは見受けられない。Aは、昼頃に起きて、気が向けば近所の書店などに出かけたり、あるいはゲームソフトを買いに行くこともあるが、自室に閉じこもって一日中ゲームをしていることが多く、午前1時か2時頃に寝る、といった生活パ

ターンが続く。夕方からのアルバイトは、欠勤することなく、継続できている。担任教師や教育相談担当教師が電話をしても、応答のないことが多かった。家族の方から相談を積極的に持ちかけることはなかった。数ヶ月後、個人面談のため母親が学校を訪れた際、その日にカウンセラーが来校しているのも、もし時間に都合がつくのであれば会ってみないか、と相談担当教師が母親に提案、まずはとりあえず会ってみよう、ということになる。

家族構成（年齢は相談開始時）：

母親；45才。パートで生計を立てる。Aが中2の時離婚。Aが中学卒業まで、遠方の地方都市B市に居住、Aの高校入学と同時に家族三人で現住所へ転居。

A本人；15才。中2から中学卒業まで別室登校。B市の高校は受験せず、現住所近辺への転居を前提に現高校を受験、合格。学校内での会話はほとんどない。家庭内においては、会話については問題ないとのこと。

姉；20才。高卒後、アルバイト。小学校高学年から中学・高校時代、不登校気味であった。

相談内容：

#1；母親、相談担当教師、治療者の3人で話す

母親は、身なりはきれいにしている。息子の不登校について困っている、何とかしなければ、という雰囲気あまり伝わってこない。ふわふわとした、心ここにあらず、といった印象である。担任や相談担当教師から話を持ちかけないと、この件は放置されたままであったと思われる。面接においても、治療者側から話しかけないと会話が續かない様な感じを受けた。

中1の一学期までは何の問題もなかったが、中2から登校を渋るようになり、教室へ入れなくなり、別室登校が始まった、という話題から始まる。母親からみれば、全く普通である、とのこと。家庭内で高校についての話題が出ると、Aは怒る、と話す。Aは、これまでも今も、家の外に出られなくはないが、大

勢の人の中に入って行くのはもともと苦手であった、ということである。

また母親は、Aの体格が小さい方であることを、悪いことであるように語る。治療者は、小さい小さいと否定的に言われるAに同情的になり、くお母さんとしては、息子に立派に育ててほしい、と思うのは自然なことでしょうね。でもまあ、からだの大きさと人間性とは、関係ないでしょうし」等と言うが、「それはそうですが…」と、やはりからだの大きさは母親にとっては大事なことであるようであった。実際は、極端に小柄なわけではない。

中1の一学期、同じ小学校に通っていた生徒に、殴られたり蹴られたり等、いじめにあった話になる。その生徒は毎日Aを待ち伏せし、「チビ」等と貶していた、Aはその生徒を「無視」することで対抗していた、ということである。

今母親が一番気になることについては、「Aが留年してしまうかもしれないということです。Aは留年はいやがると思う。このままだめなら、通信制や単位制の高校に変わろうか、とも思います」。A本人も、通信制あるいは定時制高校に漠然と興味があるらしい。

学校においては、対教師あるいは対生徒いずれについても、会話することがほとんどない、という話題になる。「家では私とも姉とも普通に喋ってますよ。一人でぺらぺら明るく喋ります」。反抗期らしい反抗期は今までほとんどなかった、とのこと。姉の不登校の話がこの後続く。

「いったいAはどこから狂ったんでしょうねえ」と母親は言うが、比較的あっさりとして、情感を込めずに、他人事のような言い方である。離婚についての話題を治療者側から向けてみると、「(離婚は) いつだったか…。よく覚えてません…。父親は会社員で、転勤が多く、「家には寝に帰るだけ」であったが、「(仕事の内容は) 何をしてたっけ…。詳しいことはよくわからないんです…。離婚の経緯や父親のことについては、それ以上は「忘れた」、「覚えてない」ということである。

「何でなんですかねえ…。普通に過ごしていたのに。金銭的には苦しい状態

は続いてきたけど、それ以外は問題ありませんでした。3人固まって、仲良く暮らしてきました」。「Aは家では明るいのに…。やっぱり、怒る人がいないとだめなんではなかねえ…」と母親は述べるが、離婚時のストレスや不登校へのしんどさなどがじっくり伝わってくる感じではない。治療者は、く離婚で、子どもたちに経済的な苦勞だけでなく、精神的な苦勞もかけてしまったかもしれない、という気持ちと、一方で、いい意味での厳しさ、というものも与えてやるのが十分でなかった、という気持ちもあったり…。でも、お母さんお一人で3人家族を何とかまとめてこられた。そんな中で、A君が不登校になってしまった。お母さんは頑張っただけなのに、何で子どもたちは不登校になってしまうのか、というやり切れなさを感じてしまうのは無理もないことだと思います」といったようなことを返すと、母親は、「いや、別に私は落ち込んでおすぐに立ち直るほうですから」と治療者の言葉に対してやや否定的な感じでさらっと答える。

入学時の転居の話題になる。母親の実家は、現居住地の近辺である。母親によると、AはB市の高校への進学を嫌がり、現在の居住地での生活を希望した、ということである。〈気分を一新して、やり直したかった〉「まあ、そうなんではなかねえ…。でもこっちは私の友だちがいないんです。Aの入学に合わせて、4月にこっちに引っ越してきました。それ以来何ヶ月間は仕事がありませんでした。10年以上B市にいました。向こうには友だちもいっぱいいました。それなのにAは今、“B市の方がいい！”って言うんです。あの子に合わせて来たのに…。〈折角A君のことを考えてこっちに引っ越してきたのに、あっちの方がいいだなんて、今になって言うなんて、って感じですね。こっちで一から出直して、何とかやっ行って行こうと思ってたところ、また彼は学校へ来なくなってしまった…。〉「考えないようにしてます。私は、楽天的なんです」。

今回の話をもとに、担任も含めて、今後のA君への対応について検討していくということ、相談担当教師が窓口になるということ、治療者はいつでも関わる用意がある、ということ等を伝え、面接を終わる。

この後、相談担当教師から、折に触れて電話が入れられるが、やはりつかまらないことが多く、つかまっても、あまり会話が續かないことが多かった。母親の側から相談を持ちかけてくることはなかった。Aも全く登校しない。その後、原級留置が決まるが、このままでは、再登校するか退学するかの問題以前に、家族との接触らしい接触なしに時間が過ぎていくだけ、といった状況が予想された。このような流れの中、再び1年生になるに当たって、A本人の気持ちを治療者が直接聞いてみよう、ということになり、学校側から働きかけ、2回目の1年生の春から、治療者とAとの面接が、不定期的に持たれるようになる。その際、Aは母親とともに来校し、治療者とAとの面接中、相談担当教師と母親とが面談する、という形が主にとられる。

#2；Aとの面接

Aは色白、やや小柄であり、終始笑顔であるが、その表情は硬い。緊張が強そうである。自ら積極的に話すことはなく、治療者側からの質問には、一応、“はい”か“いいえ”で答えることが多いが、答えに窮して言葉が出なくなる、といったことも少なくなかった。治療者側からの問い掛けがなければ、ずっと沈黙が続いていたであろう。この点については母親と共通するが、この傾向は母親よりずっと強い。

ゲームやアルバイトは楽しい、という話に続き、今回面接に来ることについては、どう思っていたか聞いてみると、“いやー…”と黙ってしまう。不登校のし始めの頃はどうか尋ねると、“これからぼくはどうなるんだろう…って、最初は思ってたけど、そのうち、何も考えなくなった…”。ただ、高校卒業の資格は欲しい、就職するときに必要なだから、と言う。今いる高校を卒業することについて聞くと、答えは返ってこない。通信制や単位制の高校がいい、と言うが、それらについての詳しい情報は、全く持っていない。

母親については、“最近は天然ボケで、楽しい。以前はそうじゃなかった”。

最近A自身も比較的楽に暮らせているかもしれないが、中2の時の離婚について、その時の母親の様子、その時Aはどう考え感じていたか、父親はどんな人であったか、また、中学時代の別室登校についてはどうであったか、B市の高校は受けずに今の高校を受験したことへの気持ち等、それとなく尋ねてみたが、いずれについてもAは黙ってしまう。

く高卒の資格は一応欲しい、ということだから、やはり、今後の方向性については考えておいたほうが良いと思う。いくつかの選択肢がある。一つは、今の学校に復帰して、ここを卒業する、ということ。まあ、いろんな手続き的な面ではこれが一番面倒ではない。もちろん、急に無理して登校し始める必要は全然ないけど。二つ目は、単位制か通信制の高校にかわる、ということ。こっちの方が自分のペースで生活しやすいかもしれない。もしこっちを考えているんだったら、自分できちんと情報を集めたほうが良い。そして、これは君の人生なのであるし、君が自分で選んだ道を、ほくは尊重する。Aは黙って聞いている。く今後のこととか、自分なりに考えてたりするの？と聞いてみると、“ほくはギターが好きで、バンドをやりたいとも思ってます。それで、音楽雑誌で見たんだけど、音楽系の専門学校で、高卒の資格のとれるところがあるんです。そこに行ってみたい…。でも、入学金とか授業料とかが高いんです…。”とぎれとぎれではあるが、しばらく2人でギターやポップスの話になる。このときは、Aはやや楽しそうに見える。その専門学校についての情報は、詳しく調べてはいない。く自分なりにやりたいことがあるんだね。その学校に行ってみたい気はあるけど、学費が高いか…。親にはそのこと言った？“いいえ…。”くお金のことで親に気を遣う？“はい…。”好きなこと、やりたいことがあるということは、非常にいいことである、ということ、また、この専門学校については、もし行きたいのであればきちんと調べておく必要があるということ伝える。そして、これから進んでいきたいと思う道については、その内容やそれへの自分の気持ち、金銭面についてのことなど、母親とは話をするべきであるということ等も伝える。

#3；Aとの面接

前回の1週間後に行われる。相変わらず会話になりにくい。面接には、緊張感を覚える、とのこと。高校生活においても緊張するそうであり、アルバイト先については、慣れた、ということである。

この1週間、今後の方針については、“あまり考えてません”。Aは専門学校の名称だけは調べてあったが、その他の情報は得ておらず、母親ともこのことに関しての話し合いは持たれていない。

これからどうなっていくかわからないこと、このまま高校を休んだままであると、再び原級留置になることなどについて、焦りはないか尋ねてみると、“別に…。まだない。(時間的期限が)ぎりぎりになったら焦るかもしれない…。これから進む道についての話や、それについて母親と相談することについての話などが、急に現実を突きつけられたようで、しんどくなかったかどうか聞いてみると、“あまり…。”。体育は苦手とのこと。

現在、アルバイトには順調に行っている、ということから、高校をやめて当面はフリーターとしてやっていく気はあるかどうか聞いてみると、“ありません”と、これにはきっぱりと答える。

もし今の高校に戻るとすれば、その戻りにくさはどこにあるか、聞いてみる。〈緊張感〉は“ある”。〈勉強が遅れているので、授業についていけるかどうかの心配があるとか〉“それもあります”。〈クラスの中の人間関係の問題〉は“別に…。あまり…” 〈そっちは適当にやれそう?〉“うん”。〈年齢が一つ上、っていうことでは問題は〉“ある”。〈何だか訳がわからない不安、っていうか、気持ち悪いっていうか、そんなようなの〉“そんな感じ”。

#4；Aとの面接

母親と今後のことについての話を“少しした”。音楽の専門学校に、母親に電話をしてもらい、授業のカリキュラムや学費について聞いてもらったとのこ

と。“費用は、年間100万円かかるらしいです”〈お母さん、何て言ってた？〉
“宝くじでも当てろって”。

今の高校の嫌な点はどこにあるか尋ねてみる。“雰囲気”〈どんな雰囲気？〉
“なんとなく”〈他の生徒たちがうるさいと思う？〉“それは、慣れたら別にいいかも…”。〈アルバイト先での人間関係のプレッシャーっていうのはなかった？〉“最初はあったけど、だんだん慣れてきた”〈時間かかる〉“うん”。今の学校の、いい点については、“…。別にない…”。

〈定時制や通信制に行きたいっていう気持ちについては？〉“？…”〈よくわからない〉“うん”。〈音楽の専門学校に気持ちが傾いてる〉“うん”〈音楽の専門学校へは行きたいけど、学費が高いし、お母さんにも経済的な負担をこれ以上かけにくいし、お母さんの気持ち的にも負担になってるかもしれないし、でもやっぱり行きたいし、複雑な心境、っていう感じ〉“はい”。

#5；Aとの面接

ギターの雑誌を椅子の上に、治療者に見えるように？置いていたので、ギターやポップスについての話題を治療者側から振る。今回、ほぼ音楽に関する話題に終始し、ぼつりぼつりとではあるが、これまでになく会話が続く。その後、アルバイトの給料を貯金している、そのお金でこつこつCDを買っている、という話題になったり、といった様子であった。

今いる高校については、比較的はっきりと、“残りたくない”と言う。雰囲気がいや、とのこと。もしやめた場合、その先のことは、まだ考えられないとも言う。

#6；まずAとの面接、その後母親と面接

アルバイトは週に3～4日、順調に楽しく行っていること、仕事ぶりを褒められたこと、アルバイト先の大学生等年長のスタッフとともに遊びに出かけた話等を楽しげにする。

母親とは、進路の話はあまりしていない、と言う。Aは、音楽雑誌から、別の音楽専門学校を見つけてくる。費用は多少安くなるが、母親に聞いてみると、「高すぎる」と一蹴されたらしい。Aは、音楽の専門学校に行くことが第一希望のようである。しかし自分のアルバイトの給料をつぎ込んでまでその学校に行きたい、とは思っていない。

単位制の高校のパンフレットを取り寄せたと言う。ただ、自宅での課題などをやりこなせるかどうかが不安であるとのこと。〈音楽の専門学校はお金が高いし、単位制の高校は宿題が多くてちゃんとできるかどうかわからない…。自分で選択するの、苦手?〉“うん、苦手”〈じゃあ人を選んで欲しい?〉“でも、選んでもらったのが嫌だったら…”。

終了後、母親との時間を持つ。「アルバイトは行けるのに、何で学校は行けないのか、アルバイトばかりやってもしょうがない…。これからどうなるのか。音楽の専門学校だなんて、好きなこと言って」と言う。治療者は、〈ご自身の息子さんの将来を考えれば、今のような調子でこの先大丈夫だろうか、と心配されるのは当然のことと思います。ただA君にとって今のアルバイトは、生きがいになっているとも思います。実際アルバイト先ではきちんと働けていて戦力にもなっているし（これは母親も知っていること）、それを自分自身、実感できているようです。これをお母さんに否定されてしまっただけは、彼の立場はなくなってしまうんじゃないか…。ギターも、こんなときに何をのんきなことを、と思われるかもしれないけれど、何か夢中になれることがある、っていうのは、いいことだと思います。今、好きなことがあって、いい仕事ができている自分がある、というところで、彼なりに充実感を感じられている。また、今後の道についても、彼なりに考えてます。本当は音楽の専門学校へ行きたいけど、今までお母さんにもいろいろ面倒かけてきた、このうえまた経済的負担をかけることはできないし、でも全額自分で負担するのは、いろんな意味で難しいし…。というように、かなりお母さんを気遣っていると思います。これまでのお母さんとの関係の中で、このように気遣えるA君に成長してきたんだと

も思います〉のように返す。母親は、「そう言えばAは、小さいときから、私をかばってくれましたね。重い荷物はいつも持ってくれてた。男手が一人ということもあって、いろいろ頼ってました。Aも逆らわずに、言うこと聞いてくれた。反抗期らしい反抗期はありませんでした…」と、比較的しみじみと語る。

#7；家庭訪問

夏休み、相談担当教師とともに、家庭での様子をうかがうため、訪問する。Aと治療者とで、ギターでひたすら遊ぶ。音楽の専門学校は、現実的ではないとAは考えている。相談担当教師は、母親に、欠席日数や欠課時数等の事実関係、原級留置が決定していること、単位制高校の情報を伝える。

#8；まずAとの面接、その後A、母親、相談担当教師、治療者の計4人で話すアルバイトも週5～6回に増え、アルバイト先であった飲み会にも参加したこと（本人はウーロン茶で我慢した）、携帯電話のチャットで知りあった年上の男性と、バンド結成の話が持ち上がっていること、まずは二人でライブハウスに行ってみたこと等の話をする。

単位制高校に見学に行ってきたと言う。以前より情報量も増えている。くもし単位制の高校へ行ったとしても、また不登校になるんじゃないか、っていう不安は〉“ある”く絶対行ける、とか言うより、誠実でいいと思う。不安のままではしんどいかもしれないけど、後になってやっぱり全然だめだった、とがっくりくるよりはいいかも。くお母さんにお金の負担をかけて、結局行けなかった、となると悪いなあ、という気持ち〉“あります。その高校は遠いのに、本当に行けるの？お金の無駄になるんじゃないの？、って言われる”くでも君としてはその高校でやっていきたい”“はい”。Aの気持ちは固まっているようであった。“そこを卒業したら、できればミュージシャンになるか、音楽関係の仕事に就きたいです”。くアルバイトも頑張ってるし、そこでの人間関係や、そ

の他の友人関係があって、新しい高校でぼちぼちやって、将来の夢もあって。それでいいと思う」と伝える。

最後に、4人で話す。Aは自分の考えを、小さい声でぼつりぼつりと告げる。母親は、「本当に行けるの？遠いし、高いお金払って、結局家にいるんじゃないの？」と言う。相談担当教師は、もう一度帰って考え直すかどうか尋ねる一方で、Aに対して、自分のことは自分で決めたほうがいいのではないかと問い掛ける。母親が、再び同じことを笑いながら言うと、Aは今までなかったように顔を紅潮させ、「ほくは動きたいんだ！」。母親は、「本当にできるの？自信あるの？」と問い詰めるように言う。Aはやはり自信がなさそうに言葉に詰まる。治療者は、無責任に大口をきくより素直でいいとも言えるということ、母親への配慮や、Aなりの将来像もあるので、〈ここはA君の意志を尊重してあげたい〉。教師は、進路変更のためには退学の必要があることを二人に伝え、それでいいかどうか確認をとる。母親も、納得する。

4. 事例の考察

本事例においては、Aはほとんど高校に登校しておらず、また不登校は中2の段階から継続していることから、高校内での何らかのトラブルのみが不登校の原因となっているとは考えにくい。詳細は不明であるが、おそらく遅くともAが中1の時から始まったいじめの問題、両親の不仲、離婚の問題、姉の不登校等々を背景とする家族の歴史におけるしんどさの一つのサインを、不登校という形でAが家族を代表して出している、と考えられる。そしてこのサインは中2の時から出されていたが、これに母親が向き合う、立ち向かう、といったことは、不登校をしても進級・卒業のできる義務教育が終了するまで、なされなかったのであろう。今回、高校において、欠席日数、欠課時数のリミットを迎えるに当たって初めて、すなわち進級できるかどうかという問題が高校側から突きつけられて初めて、問題が問題となった、と言えるかもしれない。

3つの実存性・精神的人格・創造価値：

ところでフランクフルは、精神性、自由性、責任性という3つの実存性を、人間存在の特徴およびそれを構成するものとして、特に取り上げている⁽⁷⁾。

人間には、「自然的社会的な環境世界である外面的な環境に対しても、また生きた心身的な内面的世界である内面的な環境に対しても、人間はその現存在の一瞬一瞬において態度をとる」ことのできる自由を持つ、とフランクフルは述べている⁽⁸⁾。外的な状況がいかに危険、悲惨、貧困であっても、身体的に疾患、障害を持っていたとしても、心理的に神経症的症状や、あるいはある性格を素質的に持っていたとしても、そのような人生の状況に対して、それを克服するような態度をとる自由を、またその克服とは逆の態度をとるような、つまり自由を放棄する自由をも人間は持つ、ということである。そのような自由な態度をとる主体をフランクフルは、「精神的人格」と呼ぶ⁽⁹⁾。

またフランクフルは、心理療法について、次のように述べている。すなわち、実存分析の最終的な意図は、この自由の自覚にあり、そしてロゴセラピーの最終的な意図は、人間が自分の責任に基づいて、意味や価値の世界に向かって自己決定していく、ということにある、ということである⁽¹⁰⁾。大事なあることに対する、かけがえのないある人に対する、あるいは生きる意味の充足と価値の実現に対する責任性を、人間は本来的に有していると言う⁽¹¹⁾。

この自覚や自己決定の主体である精神的人格の精神性については、次のように述べることができる。すなわち、精神的人格は、対象化してその本質について語ることはできず、その本来の存在は「遂行するという現実（現実には働く作用そのもの）にあり、その遂行現実の中でだけ、人格は‘本来的に’あることができる」のであり、もし精神的人格について語るのであれば、「本来的には常にただ、人格的なあり方の本質‘をめざして’語ることしかできない」⁽¹²⁾。もし対象化してその精神的人格について語ろうとすると、語る人格と語られる人格とに分裂し、結局精神的人格の全体を語ることはできないのである。この精神性と、上に述べた自由性、責任性が、人間的存在を人間的なものとして

特色づけると述べられている。

加えて、意味や価値の実現に関して、フランクルの述べている「創造価値」についても触れておきたい。これは、「何かを行うこと、活動したり創造したりすること、自分の仕事を実現すること」等によって実現される価値である⁽¹³⁾。何らかの創造的行為に夢中になり、没頭し、なりきっているその時、そのことそれ自体が実現されており、かつそうするその人の自己が実現されている、と言える。例えば、演奏家が、いい音楽を奏でてやろう、といった意識なしに、無意識的に、演奏に夢中になって、音楽と一体になっているその時、その演奏家の価値は実現されている、自分になっている、と言えよう。これもまた、対象化して語ることはできず、この創造価値を実現しているその時、自分である、としか言えないものである。逆に、演奏家が演奏そのものや演奏している自分について考えるとき、演奏する自分と演奏される音楽とが分裂し、演奏そのものも、それを通しての自己実現も失敗に終る。

母親との面接：

#1における母親からは、教育相談担当教師に促されて初めて来談したこと、面接においても、息子の不登校について客観的に他人事のようにあまり情感を込めずに語る様子等より、不登校について特に困っている気持ちや、何とかしてやりたいといった気持ちが伝わってこなかった。しかし、実際は中2から不登校は始まっていて、別室登校という対応もとられていること、姉も不登校を経験しており、援助機関より相応の対応がとられていたであろうこと、定期的に離婚問題が並行していたことなどより、状況的には疲労感等を面接場面でより多く表現していてもおかしくない事例であると言える。離婚時の状況やAの不登校への母親や中学校側の対応、それらによりAはどう思ったか等、詳しく把握することはできなかった。1回目の面接であり、しんどかったことを詳しく話しにくかったかもしれない、という事情を差し引いても、この無機質な印象は、Aの危機的状況に十分向き合ってきていない、すなわち、自分はた

った一人のAの母親として、Aの人生に関わり対決して行くべき存在なのである、という責任性の自覚に未だ欠ける、と思わせるものであった。中1から始まったいじめに関しても、Aの体格が小柄であることが第一の原因であるかのように話していたことも、いじめられているAの気持ちに寄り添っていなかったかもしれない、と感じさせられた。また、転居については、Aの希望であり、母親はB市での人間関係を断ち切ってまで引っ越してきたにも関わらず、再び不登校になった、と言って、Aに批判的である。しかし、転居先は母親の実家近辺であり、実際親戚との交流もあるわけであり、母親自身その関係の中で支えられている可能性も考えられるが、これら母親にとって肯定的な側面は母親から積極的には語られず、一面的にAについて否定的に述べる。この時点では母親にとって、問題はAの不登校であり、それは悪いことであると考えられていたと言え、母親自身の人生の出来事でもあるとか、家族全体の歴史の中の出来事の一つである、というように、母親の中で包括的に経験できていた、とは言えない。

ただもちろん、語られはしなかったが、Aの中学生当時は母親はその苦悩を自ら引き受け、様々な努力を彼女なりにしていたかもしれないし、その苦労があまりにも大きすぎれば、当時の諸問題をありありと想起することは、面接開始時点での母親には難しかったかもしれない、ということも考え得ることである。離婚後、母親はパートタイムの仕事で、2人の子どもを養いつつ、新たな土地で再出発しようとしたが、その矢先にAが再び不登校になった、という事情を考えれば、自分の子育ての失敗がこういう結果をもたらしたのではないか、という罪悪感や挫折感、先行きに対する不安感や無力感等を抱えきれなくなり、まるで問題ないかのように無機的、「楽天的」に振る舞わざるを得なくなったのも無理もない、という状況になったのかもしれない、と言える。もしくは当時からすでに無機的であり、別室登校などの学校側の対応を、母親は受動的にされるままに受けてきたのかもしれない、今回も同様に受動的でいるのかもしれない。治療者はそれらいくつかの状況の可能性を推察し、その上で母親の内面

にはやはり、積極的には語られないが苦悩は存在するであろう、という考えのもとに母親に支持的に接したが、いずれもかわされてしまう。

まるで問題がないかのように無機的なままでいずに、これらの苦悩をそれとして母親が自ら受けとめ、Aの人生の問題として母親が向き合えるようになるためには、少なくともAの中学生の時期から今にかけての母親のしんどさをほどよく共有できるような場所で、必要であれば母親自身の生育歴の中にある背景も振り返りながら、体験を整理しつつ徐々に認識していき、結果的に無機質である必要もなくなる、という作業の必要性があるろう、とも思われた。ただ高校内での継続的なカウンセリングは、本事例の場合、治療者は原則的には教員へのスーパーバイザーとしての臨床心理士であり、また複数校を担当していることもあって、時間的・場所的制約の中で困難であると判断された。よって、外部の相談機関でのカウンセリングを勧めてみた。しかしこれは受け入れられなかった。

教育相談の業務の一つに、クライアント側に問題を認識してもらい、必要であれば外部相談機関にリファーする、という作業があると言える。これは、単にリファーの必要性を伝える、というよりも、クライアントが問題を認識できなくさせているしんどさを共感する中で、結果としてクライアント自ら継続的カウンセリングの必要性を感じるに至る、という流れになるのが望ましいと思う。今回、治療者が（時間的制約などもあって）これを焦りすぎたか、治療者の思い巡らせていた母親の気持ちが実際のそれと大きくずれていたのか、あるいは母親にとって期が熟していなかったのか、いずれにせよそのような共感的な状況には至らなかった。

Aとの面接：

Aとの面接開始当初は、Aからの言葉はほとんどなく、母親からの情報と面接時のAの表情、振る舞いから、Aの気持ちを推察し、治療者側からそれを言語化して、確認していく、といった細かい作業の積み重ねに終始し、治療者に

とって、そしておそらくAにとっても、疲労するものであったと言える。Aを理解しようとして言葉をいくら重ねていっても、その理解がAの気持ちと合っている、理解が共有できた、といった実感がなかなか得られず、どこまで行っても共感できないような気さえた。

確かに言葉の少ない点においては母親と似ていたが、それでも少なくともAからは、困っている、という気持ちは伝わってきた。それは、慣れない1対1の場面そのものに緊張していた、ということもあろうが、今後についての未分化な不安、といったものが、やり取りの中から、感じ取ることはできた。

中1でのいじめや、中2からの不登校、両親の離婚問題、姉の不登校などについて、母親と同じように、Aも語らない。元来情感のこもった心的体験をしない性格なのかもしれないし、本当はいろいろ感じたり考えたりするところもあったが、すべて直視するには自我が脆弱に過ぎて、何らかの形でそれを避けているのかもしれないが、辛い気持ちはやはりどこかにあっただろう、と治療者は思い、またそこには敢えて深く触れずにおいた。

多くは語らないがAには、単に母親からそのように言われているからかどうかはともかく、将来の就職のために高校卒業の資格は欲しい、という意味はあり、フリーターで過ごしていくことは、Aにとっては珍しくはっきりと否定する。

また、アルバイト先ではそれなりに仕事もできて、人間関係も良好なようであり、また仕事をやり遂げている、という充実感も感じられているようでもあった。そして、ギターやポップスという自分なりに好きで打ち込めるものもあることもわかった。

これらのことから、Aにもやはり、自分の人生に対して何らかの態度をとろうとする意志はあり、また仕事や趣味に打ち込むことで創造価値を実現し、自分であろうとする力をも見て取れた。しかし、母親はAのアルバイトについては、少なくとも意識の上では、単なる小遣い稼ぎのレベル以上には感じていない可能性が高く、Aにとって価値あるものであると思ってやるよりむしろ、

‘たいしたことのないもの’として扱われて、Aに対しても直接あっさりとそのように言葉や態度で表現されてきているであろうと思われた。ギターについても同様に、単なる暇つぶしのなものとして捉えられ、またそのようにAに対して言葉や態度で評価されてきているであろう。母親によるこのような低い評価は、それが母親にとって真意ではないかもしれないが、いずれにせよAにとっては、自分の価値の実現をバックアップしてくれている、という実感を、これまで十分得られていないように思われ、またそのことが、面接開始時のAの自己評価の低そうな雰囲気と関連していると考えられた。

また、母親自身がどれだけ実感していたかはともかく、客観的には母親は‘苦勞’してきたと言え、そしてそれをAは見えてきたのである。自己を実現することで母親に経済的、心理的負担をかけてしまう、と考え、それよりは自己を表現せずに淡々と無機的に生きていこう、としていた可能性もある。

よって、今回の継続面接においては、A自身の持つ、生きることにに対して何らかの態度をとる力や、創造価値を実現していく力を尊重し、実際のAのとりそれらの行動を容認し続ける、ということを中心とした。具体的には、〈(アルバイトでの君の体験やギターに打ち込むことは) いいことであるし、そのような君をばくは尊重する〉といったように、あるいは、〈君自身の人生であるわけだし、君なりに考えていく力もあるし、現にいろいろ考えている。君の考えをばくは認める〉というように、直接的に言葉で表現していった。また、特にギターで遊んだり音楽の話を楽しむときは、治療者側も、難しいことを意識せずに、とにかく徹底的に遊び、楽しむことに専念するようにすることで、好きなことには素直に打ち込み楽しんでいい、否定されるものではない、という体験を共有できるよう心がけた。

これらの言葉がけやともに楽しむことについては、治療者側の価値観の単なる呈示にならないように留意した。すなわち、もともと外向的でない性格であったかもしれないし、母親を氣遣って自己表現をしないようにしてきたかもしれないし、価値の実現ということを十分認められてきていないのかもしれない、

ということを思い巡らせながら、Aの表現のペースに合わせる、ということで、単純な‘打ち込めるものを持ちなさい’というメッセージのみの押し付けにならないようにした。

実存性の自覚：

このように面接を進めていく中で、Aなりに徐々に、音楽の専門学校や単位制高校について調べ始める。どちらかといえば音楽の専門学校の方がいいが、経済的に難しい、母親に迷惑をかけたくない、とりあえず高卒の資格は欲しい等考えつつ、現実と自分の思いをつきあわせながら、少しずつではあるが自らの生き方に向き合い始めてきたと言える。治療者はこのようなAの態度を尊重した。しかし母親は、少なくとも表面上は、これらについて、Aは真剣に考えていない、とあっさり軽く捉えているように思われた。確かに客観的に見れば、Aの態度はそう思われても無理もないレベルであったかもしれない。しかし、これまでのAに比べれば大きな変化であるし、そのような態度を母親に十分評価されることで次のステップへの進歩もありうる、との考えから、アルバイトやギター、それに学校選択についてAの持っているであろうと思われる気持ち、そしてそれを尊重する必要性を、母親と共有するための時間を#6において持った。その際母親は、それまでとは違って、Aは自分に気遣ってきてくれていたかもしれない、ということ、過去を振り返りながら比較的情感を込めて語った。ただ、先にも述べたが、母親の無機的にならざるを得ない背景については十分に検討されておらず、このことは、今後もたびたびAの自分自身の人生への態度や価値追及の力を不必要に過小評価するかもしれない、ということと関連する可能性がある。

#8においてAは、友人関係も少し広がってきていることを話す。そしてついに、自ら次の身の振り方を決め、また音楽関係の仕事に就きたいと、将来の希望についても語る。ここに、Aは自分の人生に意味を感じることができ、また実際に自分なりの希望を実現させようと実行に移しつつある姿勢を示すこと

ができたように思う。客観的にはその将来の希望は、成就する可能性は高くはないかもしれない。しかし、それまでになく、今ここにおいて何をどうなすべきなのか、といった、自分の人生に向き合うような態度を示したことを、治療者は尊重したい、と思った。Aの人生はAの責任においてあり、また将来仮に何らかのつまずきがあれば、その時それに直面するのはAであり、そこで苦悩する力をAは持っている、と考え、Aの決断を治療者は認めた。そしてその後、A、母親、相談担当教師、治療者の4人での話の中で、母親に自分の決断をいつものようにあっさりとする否定的に扱われたとき、“ほくは動きたいんだ！”と強く主張することができた。これまでのAにとっておそらくなかったことであろう。「本当にできるの？自信あるの？」と母親は戸惑いながら問いかけたのであるが、Aの人生の選択にこのとき母親はこれまでになく向き合うことができた、とも考えられる。そう問われてAは言葉に詰まるが、“ほくは動きたいんだ！”と言えた、ということの方を大切にしたい、と治療者らは考え、Aの選択に任せることになった。そして、単位制高校に編入することになる。

面接の過程において治療者は、基本的に治療者側の価値観を押し付けることなく、A自ら生きる意味を発見するよう心がけてきた。また#6での母親面接において、母親は、Aのこれまでを振り返り、Aの立場に立って、息子はどんな気持ちで生きてきているのであろうか、といったように、思いを馳せる経験を、普段の生活ではあまりそうすることはないのかもしれないが、面接場面においてそれがあがる程度できる中で、Aには意味を獲得していく力があり、また実際そうしようとしている、ということが、認識できたと思われる。加えて、そうやってAの持つ力を認めることは別に悪いことではない、という経験が治療者との間で共有できたであろう、ということも含めて、これらのことは、Aの生きる意味への意志と価値の実現についての自覚の背景になったと考えられる。

人間存在の特徴およびそれを構成するものとしての精神性、自由性、責任性

の3つの実存性については、すでに述べた。ここで、“ほくは動きたいんだ！”という言葉であるが、これは決して意図されたものではなく、無意識的に発せられたのであろう。自ら持つ性格傾向や、自分の力だけではどうにもならないような家庭環境等を前にして、これまではそれを甘んじて受けてきたが、ここに来て、意味への意志の無意識的な発動ができ、精神的人格が、ある態度を自由にとることが、Aなりにできるようになった、と言っていいと思われる。ここに、精神性と自由性の発達を見て取ることができよう。また、この発言に対して母親に、「本当にできるの？自信あるの？」と詰め寄られ、言葉がでなくなるのであるが、無責任に軽々しく肯定できなかったところに、逆に、自分の人生を自分で歩んでいかなければならないという責任の重さの認識、意味の充足と価値の実現への責任性の萌芽が感じられた。これら精神性、自由性、責任性が芽生え、尊重され、自ら人生に対して何らかの決断を下すことができ、新しい方向性を今、持つことができた、という点において、この中退は、Aの今後の人生にとって、外傷的なものにはならず、意味のあるものになったであろうと考える。

5. おわりに

高等学校における不登校の事例には、中退していくものが少なくない、という背景のもと、外傷体験にはならない、肯定的な意味を持つ中退のあり方を検討し、それへのロゴセラピー的アプローチの有効性を事例をもとに検証した。そして、不登校から中退に至る過程において、それまでその生徒にとって不十分であったかもしれないところの、自らの人生に対してある態度をとる自由や、価値を実現していく力を尊重するような環境を設定することが、中退に対して人生における肯定的意味付けを与え得る、ということを確認した。

注

(1) V.E.フランクル、霜山徳爾訳、『神経症Ⅱ』、みすず書房、1961、p.14

(2) 内田安信・高島博監修、永田勝太郎編集、『ロゴセラピーの臨床』、医歯薬出版、1991、

p.26

- (3) 『神経症II』、前掲書、p.98
- (4) 同書、pp.59-60
- (5) 『ロゴセラピーの臨床』、前掲書、pp.77-93
- (6) 『神経症II』、前掲書、p.6
- (7) 同書、p.102
- (8) V.E.フランクル、山田邦男監訳、『制約されざる人間』、春秋社、2000、p.215
- (9) 同書、p.218
- (10) 同書、p.224
- (11) 『神経症II』、前掲書、p.107
- (12) 『制約されざる人間』、前掲書、p.225
- (13) V.E.フランクル、山田邦男・松田美佳訳、『それでも人生にイエスと言う』、春秋社、1993、p.72

A Case Study of Counseling in a Senior High School with a Student Who refuses to go to school and wants to leave school

– from the viewpoint of Logotherapy –

NAGASHIMA Satoru and YAMADA Kunio

In senior high school, continual absences often cause ultimate withdrawal from school. Therefore, when a school counselor treats students who refuse to go to school, he/she must consider the potential of the student dropping out. Furthermore, if a client makes a decision to drop out, it should not be considered traumatic, but rather a meaningful step towards the future.

One of the purposes of V.E.Frankl's logotherapy is to have meaningful experiences in order to gain a greater understanding of the meaning of life. We hypothesize that students who do not want to go to school struggle to acquire the meaning of life, and that a logotherapeutic approach is useful for such cases.

From the viewpoint of logotherapeutic theory, we analyze a case study of a student with a history of absence from school. Ultimately, the student chose to enroll in a different school with an environment that was more conducive to his understanding of the world around him. So we conclude that the client's withdrawal as a meaningful choice seems to positively correlate with the therapist maintaining a logotherapeutic attitude towards the client's own will to gain meaning.